
Sweet Days, Sweet Honey

naoki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sweet Days , Sweet Honey

【Nコード】

N7762B

【作者名】

naoki

【あらすじ】

Under the Blossomシリーズの短編。東からの電話。

友人は中央研修の間に、なにやら思うところがあったようだ。

東方軍司令部の青年将校ヴィダネイアは、室内演習場の入り口に立ち尽くしたままふとそう思う。ややあつて声をあげた。

「クローレン！」

「…ああ、ヴィデン。久しぶり」

変わらぬ様子で黒髪の青年は顔を向けてくる。つい今しがたまで剣の相手をしていた同僚に頭を下げ、鞘を握ったまま駆け寄ってきた。

東方第一隊のクローレン・シールズ少佐とは数年来の友人同士だ。生真面目な好青年というほかないこの男を、ヴィダネイアは信頼していたし二人は妙に気が合うのだ。

二人は演習場の入り口近くに腰を下ろし、ヴィダネイアはクローレンにタオルを放ってやった。

「ほらよ」

「ありがとう」

「帝都はどうだった？ 中央第二隊との合同演習だったんだろう？」
「…うん、行ってよかったよ。勉強にもなった」

汗を拭いながらクローレンは力なく笑う。やはり何かあったのだ、とヴィダネイアはそれを見て思わずにはいらなかった。疑い深く片目を眇めると、見咎めたのかクローレンが首をかしげる。

「何？」

「いや…お前、人事部に異動願出したろう。4月の配置換えで中央

に行くのか？」

「あ…」

ぱちつと空色の瞳を瞬いて、クローレンは悪戯が見つかった子どものように笑った。

「いや、3月^{あんまり}にしてももらった。人事部にも、異動は4月にならないと無理って言われたけど、コネとかいろいろ使って無理矢理早めてもらって」

「はあ？　なんだそりゃ…お前、そんなんアリか？」

あんぐり口を開いてヴィダネイアが呟くと、不意にクローレンは視線を上げる。何かに気づいたようなその仕草につられて振り返ると、演習場の入り口を巨大なダンボール箱が通過するところだった。

「シルウ？　何だその大荷物」

台車に乗せたダンボール箱を押していた女性士官が、ヴィダネイアの声に立ち止まった。のんびりとこちらに顔を向けてから、ずり下がったメガネのブリッジを押し上げる。

「ちょうど良かったです、ヴィデンさん、クロウさん。これせんぶ、今月分のクロウさんあての荷物ですので、よろしくです」

あどけない童顔のシルウことシルリルアは、ぽやつと微笑んでそう告げると、台車を放置して去ってしまった。残されたダンボール箱を見るや、ヴィダネイアは事情を悟って不機嫌な顔になる。

「まーたかよー。相変わらずお前モテンなあ…」

呆れ半分で立ち上がって箱を覗くと、両手で抱えるのも大変そうな箱の中身はすべてラブレターやらプレゼントやらなのだ。そう、彼の友人はこう見えて、腹が立つほど女性に人気があるのである。確かに容姿は悪くはないし、性格は真面目で品行方正、おまけに剣術の腕においては「東方随一」といわれる強さだ。司令部内外にファンがいるのもうなずけなくはないのだが。

クローレンを振り返ると、彼は大きく見開いた眼を瞬いて、それからなんともいえない表情になった。タオルを持って立ち上がると、ヴィダネイアとダンボール箱に背を向ける。

「クローウ？ おいちょっと」

「タオル（これ）、洗って返す」

「あ、どうも……ってそうじゃなくって！ どうすんだよこれ！」

嘆息して外に出たクローレンは、憂いを帯びた瞳で薄青い空を見上げた。

「……3月だって、遅すぎるよなあ……」

この空の下、帝都にいる彼に会うには、この場所はあまりにも遠いのだ。

紫苑の瞳の恋人を思って、クローレンは眼を閉じる。

ダンボールいっぱいのはラブレターやプレゼントをもらったって、

あの美しい青年の瞳には、到底敵うと思えない。

「早く会いたい……エル」

「…またそーいう無茶をしてくみはあ」
「仕事なんだから、仕方ないでしょう」

冷たく眼を細めてそう言うアンフィエルは本当に可愛げがない。
口は減らないがベッドから起き上がれない彼のために、レニエール・カリアニーコフ医師は点滴の用意をしに立ち上がった。夕方の医務室には、校医と不健康な教官以外誰もいない。

（荒れてんなあ…最近）

ため息をついて思い出すのは、あの黒髪の青年のことだ。
クローレンが再び東方軍司令部に戻ってからというものの、アンフィエルは荒れに荒れている。と言っても元が穏和な彼のことだ、医務室と隣の帝国軍司令部の一部を吹っ飛ばして以来、目立った事件は起きていないのだが。

「ご飯はろくに食べない。睡眠もうたたね程度しかしていない。このままじゃあシールズ少佐が転勤する前に死ぬよ」
「余計なお世話です」

アンフィエルは昔から、「レン先生」に対してだけは容赦も遠慮もない。

口を歪めてレニエールは点滴パックをベッド脇に下げ、アンフィエルの腕を捲り上げると、無造作に針を刺した。

「ッ…！」
「はい終了」

僅かに顔を歪めてアンフィエルが睨んでくる。肩をすくめたレニエールは、鳴り出した電話を取りに事務机に向かった。

深く息を吐いて、アンフィエルは透き通るようにしろい顔を窓へ向けた。先日粉々にしてしまった窓ガラスは、ガムテープで不恰好に修繕されている。見るともなく眺めながら、かすみそうになる視界を幾度も瞬く。

「…クロウさん…」

3月にはまた会える、と彼は言った。

(一分一秒でも早く、その日が近づけばいいのに)

視界が潤んでぼやけ始めた。泣く前から眼は僅かに赤い。みつともないとは思うけど、思い出したら泣いてしまうのだから仕方ない。お陰で連日寝不足だ。

「アンフィ。きみに電話だよ、」

切なげな雰囲気浸っていたアンフィエルは、カーテン越しのレニエールの声に反応するのが遅れた。

「シールーズ少佐から」

そのセリフから一拍置いて、ばたばたガシャンと物音が響く。ベッドを仕切っていたカーテンがすごい勢いで開き、慌てた様子のアンフィエルが飛び出してきた。

「クロウさんっ!？」

「うつうつんそうだけど、っていつか眼エ青ッ!」
「替わってください!」

左手の点滴針を引きちぎる勢いで抜き去ると、アンフィエルはほとんど奪うようにして受話器を取った。

「もしもし!？」

『は、はい』

数日ぶりに聴いた声は、緊張したように上擦っていた。思わず涙ぐみそうになる。努めて冷静な声を絞り出した。

「…どうしたの、急に。何かあった？」

『いえ…声が聴きたくなつて。用がなければいけませんか?』

「うん、そんなことない。ただ、ちょっとびっくりした。…僕も、声聴きたかったから」

くすぐったく思いながらそう笑うと、クローレンが電話越しに照れるのが解った。

『変わりありませんか? あれから具合はどうですか?』

「元気だよ」

『…またあんまり寝てないんでしょう。隠しても無駄です。エルは解りやすいから』

「そう?」

『そうです。食事も三食きちんと摂ってください。仕事が忙しいとか言つて、昼抜いたりしたら駄目ですからね』

「うん、解った。ちゃんと食べる」

傍で聞いていたレニエルは脱力した。この態度の差は一体なんなんだろう? レニエルからしたらクローレンに対するアンフィエルのあの素直さは、気持ち悪いくらいだ。

とはいえ大切そうに受話器を抱えて、一生懸命に耳を傾けている

彼の姿は微笑ましかったから、悪くはないかと肩をすくめたのだっ
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7762b/>

Sweet Days, Sweet Honey

2010年10月18日07時50分発行